
又四郎剣風抄

抜冬斎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

又四郎剣風抄

【Nコード】

N0915E

【作者名】

抜冬斎

【あらすじ】

水霧流の達人であるが、独特の闘い方の剣術のため竹刀剣術には収まらない又四郎の月日を綴った時代小説です。

- - 砂塵剣千鳥の章 - -

又四郎剣風抄 - - 砂塵剣千鳥の章 - -

一 脱藩者

「さてと、きょうもきょうとて浪人生活じゃのう。」
と、秋月又四郎は軽くのびをする。

時は泰平の江戸時代中期で、場所は江戸長屋である。

故郷の河双藩を脱藩してから、ここ江戸に滞在してもう3ヶ月になる。月代もそれなりに伸びて浪人らしくなっている。

脱藩したのには理由がある。

河双藩の筆頭家老の間宮左之進が藩主の娘のさくを強引に手に入れようとし、現場にいた又四郎が、迷わず間宮を斬ったからである。

事を公にすれば藩主の娘も不憫であろうと考え、あえてなにもいわずに脱藩したのである。

当然、間宮派の人間は又四郎を目の色変えて探している訳だが、どうも藩主の力が働いているらしく思うように搜索ができないようだ。藩主の娘さくが藩主に事の真相を話したのかもしれない。

藩主としては事が公に事実であれば間宮一族を捕らえることもできたが、真偽の確認をまたずに
抜け目ない間宮が藩主にあることないことを言い訳にして事をうやむやにしたらしい。

藩主は、藩の実力者であり実質的に藩の財政を支えている間宮を除くよりはとりあえず様子見を選んだらしい。

というわけで遠く離れた江戸でその日暮らしの浪人生活を又四郎は過ごしているのである。

仕事は主に非定期で雇われの依頼により糊をつけているが、現状は依頼がなく懷が寂しい状態である。

又四郎は郊外の試誠館道場へ足を運んだ。試誠館道場は町道場であり、主に商人や町人を中心とした門下生をおいている。

道場主の境心矢兵衛は境心流剣術を広く認めさせた剣士として名が高かった。

商人・町人を中心としているために、それほど殺伐とはしておらず、なおかつ金払いがよいため道場の経営は良好と思われた。

又四郎も剣術の腕には覚えがあり、試誠館で町人に手ほどきをし、見返りも僅かながらに得て臨時の収入としている。

又四郎は国元の藩在籍中に水霧一刀流の目録を得ていた。

免許皆伝の実力は十分にあったのだが、又四郎は竹刀の剣術向きではなかったためと思われる。

実際又四郎はよく喧嘩を吹っかけられ、いやいやながらも真剣の勝負を数度したことが実はある。

又四郎の実践的な勝負勘は優れていた。道場の竹刀剣術が優れた者には特に強かった。

発想が違うのである。

又四郎は元々子供の自分に体が小さいながらも素手での喧嘩をよくしていた。

足を払い、蹴りとばし、投げ飛ばすという技を知らず知らずの内に身につけて相手がどんな大男であろうと体を崩し、急所を殴り蹴飛ばすという「小が大を制す」を地でいつていたのである。

そのため実践的な勝負において発想が剣術のみでななかった。剣をきり結ぶ際に相手の隙をまず作るために近くのを石を投げて利用したり、

睨み合いながら太陽光が目に一瞬はいるように相手を誘導したりも考えていた。

組めば、剣と同時に足も払えば、頭突きもすれば、剣を押さえながら投げ飛ばす。竹刀剣術家には到底考え付かないことである。

剣術の腕もたつのだが、そのような剣性を国元の藩道場主に見抜かれたのだろう。水霧流の免許皆伝には至らなかった。

だが竹刀剣術にはそれほど技術がないのが逆に試誠館ではよかったのかもしれない。

実際に江戸道場主の境心には竹刀ではかなわず、境心も道場主である自分には叶わないのだが、実力は高いと認めていた。

道場の町人相手の軽い指南的な役割には適所だったと思われる。

試誠館の道場での稽古を終わり、なおかつ僅かながらでも指南料として賃金をもらい又四郎の心は晴れていた。

久しぶりに魚料理が旨いと最近名を挙げている「羅頓屋」に行こうかと思い、足を羅頓屋へと向けた。

二 刺客登場

ふと前方から歩いてくる浪人が又四郎の目に入った。左足が逞しいのが袴の上からもわかる。

刀を片時を身につけて鍛錬している証である。なおかつ目線が細いのだが、独特の気をまとっている。

「明らかに強わもの」だなと又四郎は思った。

又四郎には道いく相手を見ながらその相手と仮想的に空想で戦ってみるという悪癖がある。

その悪癖が今回は良かったといえるかもしれない。

その相手は又四郎に近づくにつれて殺気が伝わってきた。悪癖がなければきづかないような小ささではあった。

ただ確固たる殺気を又四郎は感じていた。

不気味である。顔は面長で目は細く頬骨がでている長身痩せ型のその剣士は顔色ひとつ動作ひとつ変えずに静かな殺気のみを増しながら又四郎とすれ違うように前方から歩いている。

又四郎は自然に右斜めにその浪人との距離を離れるように歩んでいた。

そしてその浪人とすれ違うと同時に又四郎は激しい殺気を感じ、咄嗟に前方へ跳んだ。動物的な理由であった。

一瞬左肘に焼き棒をつけられたような感覚がおそい、それが浪人の剣だと気づくのに時間はかからなかった。

浪人の一撃は居合い斬りであつた。居合いは一瞬の剣のため又四郎のように体が勝手に動かなければよけれなかつたであらう。

しかもすれ違いの後ろからの不意打ちの居合いである。又四郎はよく避けれたなと自分で思った。それほどに浪人の居合いは速かつた。

浪人は無表情な中にも今の一撃を避けられたことに多少の驚きの様相が伝わつた。

幸いに左肘の傷は浅かつた。前方に転がり避けると同時に又四郎は剣を抜き、すばやく正眼に構えた。

浪人は居合いの一撃から八双の構えに移っている。

三 砂塵剣千鳥

「ゆえをききたい」と又四郎は浪人へ油断なくつぶやいた。

浪人は一切、構わず無表情に又四郎をみて次の攻撃にうつる様相である。

とりあえずこの状況ではこの浪人と斬り合う以外に方法がないと又四郎は思った。道には誰一人いなく、足の速さも相手のほうが速いと又四郎は判断した。走って闘いを避けることはできないようである。

できればゆえをききたいため、捕獲したいところだが尋常ではない
剣術使いである。

相手を斬るつもりでなければこちらが斬られるだろう。又四郎は覚
悟をきめた。

相手を睨みながら周囲を観察する。日の光はいまお互いが向き合う
右側から注いでいる。地面は乾いており砂もある。

風は右側から左へとやや強く流れている。

又四郎は正眼に構えながらじりじりと右側に回っていった。

自然に日の光は背から相手に注ぐ形になり、又四郎は風上にたった。

実践においてはこのような細かい布石が意外に効くことを又四郎は
知っていた。

浪人は意に介さずという形で又四郎の隙を伺っている。

又四郎は右足で地面を叩き、砂をまわせた。風上にいるため砂は浪
人に向かって流れていく。それほどまったわけではなく腰から下の
足元が不透明になる程度であった。

ふと浪人は「笑止」とつぶやいた。浪人はその又四郎の行動が砂に
よる目潰しを意図したものと思っただけ。

浪人はその砂塵による足元の不透明さを逆に利用した。

構えを八双から一瞬にして下段に移しそのまま稲妻のように切り上
げてきたのである。居合い使いらしい恐ろしい速さであった。

又四郎は今度は避けずにその攻撃を待っていたかのように飛び込んだ。砂塵がさらに舞う。

又四郎は浪人の下段の切り上げを上から押さえ込んでいた。と同時に相手の踏み込んでくる右足を左足で払っていた。

足を払うというよりは相手が踏み込んでくる右足を又四郎の左足で押さえたとの方が正確であろうか。

当然相手の重心は浪人自身の踏み込みの速さに支えきれずに体が泳ぎ崩れていく。

すかさず又四郎は押さえている剣を上段へと払いながら半回転してそのまま上段から袈裟がけに斬った。

相手の体がくずれていたため、肩口からはいり首筋へと太刀は一瞬にして入った。浪人は声もせず、そのまま転げ崩れ絶命した様である。

又四郎が砂塵を舞わせたのは、足元を不透明にさせ下段の攻撃を誘うという誘導であった。先に太刀筋を想定できていれば防ぎ様もある。

同時に不透明な足をかけるという又四郎ならではの戦術であった。

そのさまは翼で砂をはたはたと舞わせる鳥の「千鳥」をおもわせた。

事が終わったと思ったたら又四郎は急に汗が噴出するのを覚えた。同時に息苦しくなり口をぜいぜいと喘いだ。

相手は何者であろう。明白に刺客であった。これだけの使い手を差し向けられるとなると国元の間宮が関連していると思えた。

間宮は強引に又四郎の口をふさぎにきたのであるようである。とすれば、第二、第三と刺客はくるであろう。

見事な勝利ではあったが、又四郎はこれからの闘いを予想したかのように軽く身震いした。
とはいっても腹がへっている。

四 空腹には勝てず

「腹はへるもんじゃのう」と苦笑しながら又四郎はつぶやいた。

とりあえず「羅頓屋」に行くかと又四郎は思った。

どうにもならないときは飯を食い寝るといふのは又四郎の常であり、その楽天性は又四郎の魅力でもあった。

- - 水面剣双蟬の章 - -

一 序章

脱藩浪人秋月又四郎は江戸で気ままなその日暮らしの浪人生活を過ごしている。

脱藩したのにはいささかの理由がある。

最近、河双藩に急速に力を伸ばしてきている家老に間宮左之進というものがいる。

その間宮左之進が筆頭家老の片桐絃之介の娘のさくを強引に手に入れようとし、現場にいた又四郎が、

迷わず間宮を斬りつけたからである。間宮は深手を負ったが命は拾った。

又四郎は事を公にすれば筆頭家老の娘も不憫であろうと考え、あえてなにもいわずに脱藩したのである。

当然、間宮派の人間は又四郎を目の色変えて探している訳だが、どうも筆頭家老の力が働いているらしく

思うように搜索ができないようだ。筆頭家老の娘さくが片桐に事の真相を話したのかもしれない。

筆頭家老としては事が公に事実であれば間宮一族を捕らえることもできたが、真偽の確認をまたずに

抜け目ない間宮が藩主にあることないことを言い訳にして事をうやむやにしたらしい。

藩主は、藩の実力者であり実質的に藩の財政を支えている間宮を除くよりはとりあえず様子見を選んだらしい。

というわけで遠く離れた江戸でその日暮らしの浪人生活を又四郎は過ごしているのである。

仕事は主に非定期で雇われの依頼により糊をつけているが、現状は依頼がなく懷が寂しい状態である。

一ヶ月ほど前に又四郎は訳もわからないまま決闘を行っている。その際は砂塵剣千鳥により辛くも生き延びた。

命を狙われるのはやはり家老の間宮と関係あるのであろうか。何もわからないまま平穩に一ヶ月が過ぎ

又四郎もあの決闘は単なる無頼漢のものによるものかと考えはじめていた。

二 知鶴の香り

そんな折、隣に引っ越してきた者がいた。

一人暮らしの女性であつた - -

黒ぐろと濡れているような眼、小さく少し厚めの唇、頬にやや肉のついた色白の品の良い卵型の顔。

優雅で美しい女性であつた。何故一人なのが皆目わからない。

「お侍さん。よろしゅうに。」

と丁寧な挨拶をしてきた。名前は知鶴。――仕事は小唄を町で教えているという。

「女性の一人暮らしは物騒だの。」と又四郎は心配になっていた。

「こう見えても、それなりに世を知ってますのよ。」と知鶴はややはすっぱに答えた。

「でも、隣がお侍さんだと安心ですわ。」

又四郎はまんざらでもなかった。

知鶴がその場をあとにした時、心地よい香の匂いがかすかにした。

又四郎は最近よい仕事にあわずにややくさっていたのだが、

知鶴のおかげで気分が明るくなってきた。又四郎の魅力は単純なところでもある。

三 刺客登場

又四郎は橋を渡り、初夏の日差しを浴びながらゆつくりと散歩をしていた。

知鶴のことを若干思っていたが、それは直に打ち消されることにな

った。

向こうから長身で痩せ型の剣士が歩いてくる。手足が長いが筋肉はあまりない。

眼は細長で開けているのか薄めである。

若干華奢な風貌であったが、いつものように又四郎の悪癖が働いた。

又四郎には道いく相手を見ながらその相手と仮想的に空想で戦ってみるという悪癖がある。

こんな相手だったらどうするかな・・・。

そんな事を考えながら、歩いているとその剣士は不気味な笑顔をしながら、

又四郎に向かって手を振りながら遠くから話しかけてきている。

剣の殺気を感じたが、そのあまりにも明け透けな態度から急襲はないように思えた。

又四郎は遠くから話しかけてくる剣士に答えた。

「貴殿とは何処で会いましたかな。」

その剣士は不気味な笑顔でこう答えた。

「いや、初対面でございます。貴公の命をもらいにきた。」

又四郎はそのあまりにも明け透けな答えに少々面食らいながらも鯉口を切りながら、距離をとった。

四 剣派は拔風流

「ゆえをききたい」と又四郎は浪人へ油断なくつぶやいた。

浪人にはやりと笑い、「そうさな。我が流派の再興というところだ。」

そっぴいながら目の奥に不気味な炎がゆらめいたのを又四郎は読み取った。

「流派の名は？」又四郎は相手が最も話したいであろう質問をしながら相手の戦闘力を測っていた。

「冥土の土産だ、我が流派は「拔風流」。」

その名を聞いて又四郎は顔色を変えないようにするのに苦慮した。

「拔風流か……。知っている。」と心の中で呟いた。

いわゆる道場流派ではない。構えはなく、完全な居合い剣である。

初めの居合いの一撃で相手を倒すのが拔風流である。そのためいわゆる正眼・上段・下段といった構えが一切無い。

抜刀の構えのみである。そもそも初太刀で決めるのを極意としているため構えを必要としない。

また相手を必ず倒せるという自信から不意打ちといった事も一切しない。必ず向き合って正々堂々の勝負をする。

時の権力者から恐れられたため、抜風流剣術はあることないことを咎められ消滅したはずである。

又四郎はその昔、師匠である水霧才蔵から「万が一、抜風流という剣術家に会ったら逃げろ」と教わったのを思い出した。

そうすると浪人の長い手は鞭のようにしなり抜刀し、長い足は一瞬にして相手との間合いを詰めるのであろう。

一見きゃしゃな浪人の体つきも全てが抜風流に適しているように思えた。

浪人は「抜風流を知っているみたいだな。」と若干の悦に呟いた。顔色で読まれたらしい。油断ない相手だ。

又四郎は「ああ、少しはな。しかし俺みたいな無名な浪人を斬ったところで貴殿の流派の名が上がると思えないが。」

と浪人の目的を誘導してみた。

浪人はまた不気味に、にやりとして

「それはそうだ。しかし流派の再興には金があるのでな。貴公には恨みはないが死んでもらおうか。」と呟く。

金で雇われた - -

「誰の依頼でござるか。拙者、人に恨まれる覚えはないが。」

「さすがにそれは話せぬな。まあ人間誰に恨まれるか分からぬものよ。」

とその剣士は答えたが、依頼主は間宮しかあるはずがない。

間宮から完全に狙われている事実には驚愕したが、それ以上にこの浪人の

剣についても驚いていた。この浪人は自分の剣に完全に自信を持っているのである。今こうして話している間にも居合い剣であれば

先の先をとるはずである。しかし相手は又四郎が剣を抜くのを待っているのである。完全に勝負をして勝つという自信と

それに裏づけされる経験がなければ到底できない決闘の仕方である。

又四郎は相手に剣気を送りながらも、周囲を観察した。足の近くに手ごろな石でもあれば蹴飛ばし相手の隙を作れる

かもしれない。しかし周りは整備された道であり、又四郎の利用できる物は塵ひとつ無いように感じた。

相手は「どうした？はやく剣を抜け」と催促してきた。

又四郎は覚悟をきめた。

右の背を相手に向けるように腰をひねり、居合いの剣の構えをとつ

た。

つまりお互いが居あい抜きの構えをとり対峙している。

相手の眼は鷹のようになった。本気になったようだ。

じりじりとお互いが間合いをはかりながら相手を伺っていた。

相手は鷹のような眼をぐりぐりと動かしながら

「貴公……。居合いとすると見せかけて逃げるつもりだな。」と呟いた。

恐ろしい相手である。

まさにそのとおりであった。又四郎は剣を抜いて構えるのではなく、居合いの構えを選んだのは

逃げるためであった。

つまり左に腰をひねる居合いの構えは実はそのひねりを利用して右後方へと回転しながら一気に跳びはね、

持っている剣は左手で柄のまま後ろに回転して相手の居合いの剣を払いそのまま一気に逃げようと

又四郎は考えていたのである。

一閃の剣を後ろへ飛ぶことと左からの鞘ごとの剣による防御により防げると考えた。

そしてそれさえ防げば、又四郎と相手の足はほぼ互角で又四郎のほうがスタミナがあるであろうという分析からであった。

つまりスタートさえ防げれば、足はほぼ互角で相手が剣を抜いて走らなければならない点と

スタミナが又四郎の方ががあるため逃げ切れるとふんだのである。

相手は「貴公……。なかなか良い考えではあるな。しかし……。だ。左の剣が払い終わり、必ず一瞬背を向ける瞬間があるだろう。」

この距離なら充分だ。背を向いた瞬間に貴公を斬れる。」

又四郎はどうするかなと考えた。この作戦の死角を読まれたからである。左の鞘ごとの剣の空振りを狙われたら、

一瞬背中が無防備になる。

相手は鷹の様な眼を相変わらずぐりぐりと動かしながら「それでもやってみるか……。」「と呟いた。

五 水面剣双蝉

じりじりとどれほどの時がすぎたのであろうか。

又四郎はこめかみから汗が垂れるのを感じた。

そしてその汗が地面に落ちる瞬間に又四郎は後方に回転しながら跳

んだ。

相手は百も承知という事で踏み込んできている。

後は又四郎の剣の払い終わりを狙って背中に一撃に斬ればよい。簡単なことだ・・。

しかし相手の鷹のような眼は一瞬空中を泳いだ。又四郎のあるはずの背中がどこにもないのである。

下段だ・・ 同時に神速の居あいで下段へと抜いた。しかしその判断は一瞬の遅れをとっていた。

又四郎は地面にくつつくぐらいに屈みながら、

素早くくると右足を地面に水平に回転し相手の踏み込んできた右足を蹴り払っていたのである。

水面蹴り - -

相手は踏み込んだ足を払われ、空中に放り出された。

そして遠心力がついた居合いの剣を相手が水面蹴りで空中に払われた体の右首から逆袈裟懸けに下から回転のなすが

ままに切り上げた。

その様を上から見ればくると二つの翼が一瞬に回転しているよう
- -
う

二匹の川蝉が水面を同じ軌道で一瞬にして順次に攻撃したようであつた――

又四郎の作戦は見事であつた。後方へ伸び上がるように回転しながら跳び上がり、着地と同時に地面にくつつくぐらいに屈みながら

水面蹴りを行い、遠心力をつけた居合いの剣を抜く。

一瞬相手は又四郎の姿が消えたように感じたはずである。その前に又四郎の逃げるであろうという読みの思い込みも効を奏した。

また居合いは基本的に腰からの切り上げの太刀筋である。又四郎が屈んだことにより下段へ方向転換はいかに神速の抜風流で

もわずかに遅れをとつた。又四郎はそれも考慮に入れていた。

相手は一瞬にして絶命した。

又四郎は全身から汗がまたもや噴出した。恐ろしい相手であつた。

あくまで正々堂々と勝負してきた。もし相手の技量で何が何でも有の勝負を挑まれたら、かなわなかつたであろう。

そしてこのような刺客が次々と送られてくるのは間宮がいる限り明白であつた。

六 何故かの予感

間宮といずれけりをつけねばなるまい――そう考えていた。

しかしどうやって？

又四郎の頭に堂々巡りの考えが浮かんでは消えた。

そして、めんどくさくなってきた。

「まあ、とりあえず飯を食ってから考えるか。」

又四郎は命を狙われているのだが、いつものようにあくびをしながら、

最近、天婦羅料理で名を挙げている「備前屋」へと足を向けた。

途中で知鶴に会った。小唄師匠の帰り道であるという。

「天婦羅でも一緒に食わぬかの。」

「それはもう。ご馳走になります。」

知鶴は又四郎の男の面子を壊さぬように答えた。

「私も旦那に伝えたいことがあるんですよ。」意味ありげに答えた。

又四郎はその言葉が恋愛事でないことを感じ取った。

この女性は何者なのであろう　・・・

味方であることは何故か分かった。

「もしかして、河又藩と関係があるのではないか。」

そんな直感に又四郎は捉われもしたが、魅力的な女性と飯と一緒に
食う - -

それでいいじゃないか。

又四郎はいつものように楽天的に思いなおした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0915e/>

又四郎剣風抄

2010年10月11日02時09分発行